

# 「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」(審議経過報告)

～「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組～

平成23年8月29日 コミュニケーション教育推進会議

コミュニケーション教育推進会議においては、国際化の進展に伴い、多様な価値観を持つ人々と協力、協働しながら社会に貢献することができる創造性豊かな人材を育成することの重要性を踏まえ、子どもたちのコミュニケーション能力の育成を図るための具体的な方策や普及の在り方について議論を行い、平成23年8月に審議経過報告を取りまとめた。

## 1. コミュニケーション能力が求められる背景

### (1) 社会の変化と子どもたちに求められる能力

- 21世紀はグローバル化が一層進む時代。多様な価値観、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々とともに、正解のない課題、経験したことのない課題を解決していかなければならない「多文化共生」の時代。
- このような時代を生きる子どもたちは、積極的な「開かれた個」(自己を確立しつつ、他者を受容し、多様な価値観を持つ人々と共に思考し、協力・協働しながら課題を解決し、新たな価値を生み出しながら社会に貢献することができる個人)であることが求められる。

### (2) 子どもたちの現状や課題

- 子どもたちは気の合う限られた集団の中でのみコミュニケーションをとる傾向。
- インターネットを通じたコミュニケーションが子どもたちに普及している一方、外での遊びや自然体験等の機会の減少により、身体性や身体感覚が乏しくなっていることが、他者との関係づくりに負の影響を及ぼしている。

### (3) 新しい学習指導要領における言語活動の充実

- 新しい学習指導要領では、言語活動の充実により、コミュニケーションに関する能力や感性を育んだり、情緒を養ったりすることも期待されている。

### (4) コミュニケーション能力の捉え方とその育成

- コミュニケーション能力を、  
「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ合意形成・課題解決する能力」と捉え、多文化共生時代の21世紀においては、このコミュニケーション能力を育むことが極めて重要。
- コミュニケーション能力を学校教育において育むためには、
  - ① 自分とは異なる他者を認識し、理解すること
  - ② 他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考すること
  - ③ 集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと
  - ④ 対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと
 などの要素で構成された機会や活動の場を意図的、計画的に設定する必要がある。

## 2. コミュニケーション能力を育成する手法・方策

### (1) これまでの取組

- 諸外国では、クリエイティブな活動をする実践家やアーティストが学校でワークショップ型の授業を行い、子どもたちの創造性やコミュニケーション能力等を育む機会を設けている事例が多く見られ、成果を上げている。
- 文部科学省においては、平成22年度から、コミュニケーション能力の育成を図るため、芸術家等を学校へ派遣し、芸術表現体験活動を取り入れたワークショップ型の授業を展開する事業が実施されている。

### (2) 取組の効果

- 他者認識、自己認識の力の向上  
ふだんは見ることのない他者の一面を見いだしたり、自分と異なる状況を擬似的に体験したりすることで、他者認識や自己認識の力が向上する。
- 「伝える力」の向上  
相互に伝え合うことの喜びに気付き、少しでもうまく伝えたいという意欲により、表現手法が工夫され、「伝える力」が向上する。
- 自己肯定感と自信の醸成  
子どもの良い面や優れた面が引き出されたり、子どもたちが互いに多面的に発見・評価したりされたりすることによって、自己肯定感と自信の醸成がなされる。
- 学習環境の改善  
上記の効果により、子どもたちの相互の人間関係が良好になり、学級の雰囲気改善されて、学級全体としての学力が向上する。また、いじめ・不登校、暴力行為などの問題の解決にもつながる。
- 授業改善や学級・学年経営への効果  
芸術家等の表現活動の専門家によるワークショップ型の授業は、教員にとって、授業手法や評価方法を見直し、改善する機会となる。また、学級の雰囲気の改善により、学級経営や学年経営が円滑に進む。

### (3) 効果的な手法・方策

- 実施に当たっては、
  - ・ グループ単位(小集団)で協働して、正解のない課題に創造的・創作的に取り組む活動を中心とするワークショップ型の手法をとること
  - ・ 演劇的活動など表現手法を豊富に取り入れていること
  - ・ ワークショップの理論や手法を備えた芸術家等の外部講師が授業に参画することが大事である。
- 発表を目的化せず手段として位置付け、創作やグループでの話し合い等といった活動の過程を重視することが重要。その際、ワークショップでは、「導入過程」「展開過程」「ふりかえり過程」という要素をもったプログラムを意識的に組んでいく必要がある。

今後も中・長期的観点から、子どもたちの発達段階に応じたコミュニケーション能力を高めるための方策等について検討。